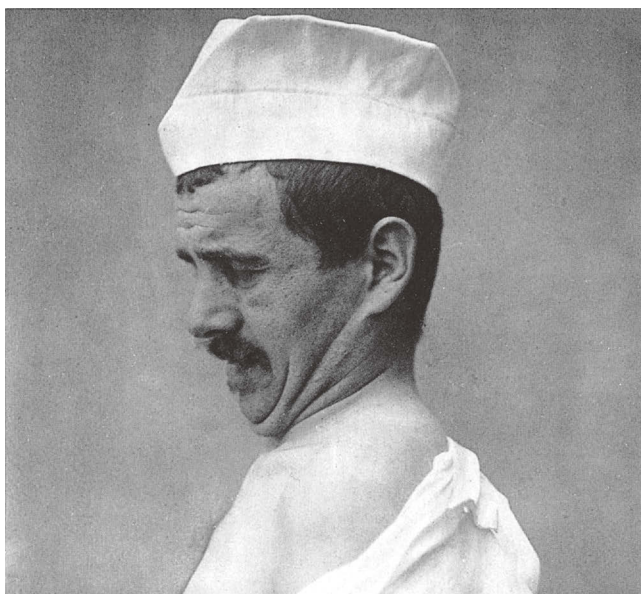




BRAIN and NERVE 70 (3) : 262-263, 2018

今月の表紙

河村 満^{a)}*

岡本 保^{b)}

菊池雷太^{c)}

今回の写真は、「頸筋と顔面筋の両側性攣縮」¹⁾と題された論文に掲載されたものです。症例は23歳男性で、歩兵隊の兵士です。以下に詳細を示します。

要約すると、病気は一連の攣縮のために、発作的に生じ頸筋を襲うため、軍隊機能を果たすための訓練とは合致しない姿勢を彼に与えることになる。

(中略) この若い男性は市民生活において聖職者の生徒で、家庭は農民の出身であるため、彼同様神学校に入った仲間たちと同じレベルを維持するために大いに勉強しなければならなかった。こうした頭への詰め込み状態は、既往歴でその痕

跡がわかるような特異な神経質的傾向を助長した。

(中略) 精神面では、彼は特筆すべきことを話している。彼は6歳のとき、兄弟と遊んでいて家に火をつけ、その結果もたらされた家族にとっての大惨事後、両親の頻繁な論争や不和のもとだった火事の原因が判明するまで、つまり14、15歳になるまでそこにとどまった。

(中略) ある日、訓練中に最初の明らかな発作が起こった。彼は項が冷たく感じると同時に、頸筋特に胸鎖乳突筋が攣縮を起こし、頭部が規則にそぐわない姿勢をとった。下士官は彼を叱責し罰しさえした。その日から攣縮発作は頻繁となり、特に患者に頭部の側方への動きを命ずるときにみられた。同室の同僚にからかわれ、彼を決まって罰する上司らには悪ふざけとみなされ、彼は受診したが、診察した医師は彼をちょうど静止時に診たため最初、病気だと思わなかったことは疑いない。

発作については、次のような描写があります。

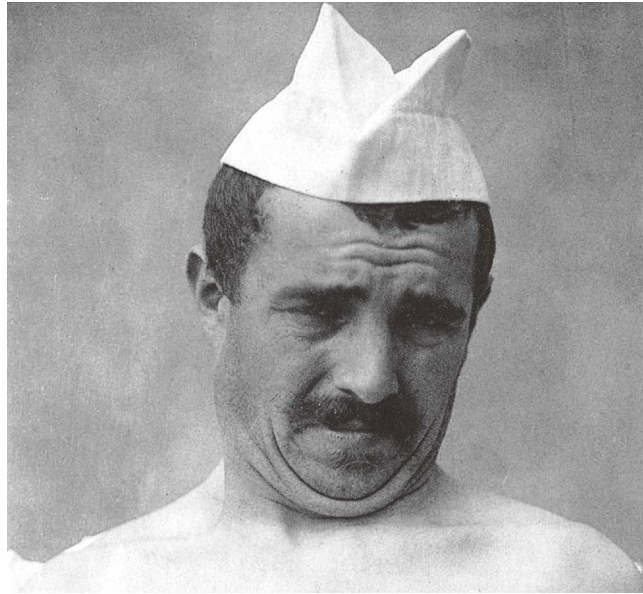
発作時の患者の診察所見は次のとおりである。頭部が高度に前屈し、顎が胸骨に接触し、時には頭部が左肩上に側屈する。最初に驚くことは、非常に目立つ皺の存在で、二重というより三重の顎がつくられることである。皮膚と皮下脂肪の皺を決定するのは単に強制的に頭部を屈曲することによるのではないというのは、触診で広頸筋の攣縮を感じるからである(写真)。

頸の両側で、2つの胸鎖乳突筋が急に張りつめるのを目でみて、手で感じる。後方で僧帽筋が同様に硬くなっているが短縮はない。

発作が始まり、時にはそこにどまるのは二重顎を伴う胸鎖乳突筋の攣縮からである。しかし、それに顔面筋が加わることが最も多い。口唇の動きが生じ、鼻翼がやや動揺し、とりわけ眼瞼攣縮、より正確に

a) 奥沢病院名誉院長, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科

*[連絡先] kawa@med.showa-u.ac.jp



は眼瞼の素早いしばたきが生じ、額の皮膚に深い皺ができる。

鉄道脊髓症 (railway spine) は、鉄道事故後に心身の不調を訴えるもので、19世紀後半に鉄道の普及に伴って登場しました。シェルショック、戦争神経症と呼ばれた症状は第一次世界大戦における凄惨な塹壕戦を生き残った兵士にみられました。どちらも当時はその原因が器質的なもの (脳震盪や脊髓震盪) であるか、心理的なものであるか議論がありましたが、現代では心的外傷後ストレス障害 (posttraumatic stress disorder: PTSD) であるという見方に落ち着いているようにみえます。

今回の症例も、自らの火遊びにより自宅を焼失させてしまったことが記されており、このことが攣縮の一因とし

てほのめかされています。

興味深いのは、この症例が「治ろうとしない患者」である点です。

われわれの患者は見かけ上は完璧な健康状態で軍隊に戻り、病気の発現を兵舎での生活のせいにし、矯正と並行して賠償金の名目の手当を得ることに専心した。詐病者ならず、彼は治ろうとする意志がほとんどなく、おそらくその精神状態に病気が長びく原因を見出す必要がある。また、機能性攣縮は、その治療を遅らせる二次的原因がないにしてもしばしば治療に強く抵抗するという事実を考慮しなければならぬ。

(中略) この若い男性は軍隊の奉仕中に病気に罹患したと信じてお

り、この状況を利用する要求しか頭がない。このような精神状態では、治療が無効である危険性があり、彼は入院時とほぼ同じ状態で退院しその後、完全に消息を絶った。

福祉国家の誕生とともに生まれた年金神経症 (pension neurosis) や賠償神経症は、年金を (より多く) 得たいという動機から発症することで知られており、この症例にも同様の記載がみられています。この論文は、患者が消息を絶ったところで終わりますが、彼に対してどのような治療が可能であったのか、100年以上の未来を生きる私たちは改めて考える必要があると思います。

文献

- 1) Gausseil M: Spasme bilatéral des muscles du cou et de la face. Nouv Iconogr Salpêtrière 17: 337-342, 1904